

魚町と今川義元公

豊橋祇園祭との関わり

現在、吉田神社の例祭「豊橋祇園祭」は、7月第3金曜日より3日間行われます。その最終日、頼朝行列の中心であるお神輿の担ぎ手は古くは魚町衆が担い、昭和40年代までご奉仕頂きました。魚町衆が担ぐ吉田神社の神輿は、その勇壮な様から「暴れ神輿」と呼ばれました。

吉田神社のお神輿と 今川義元公

天文15年（1546）に今橋城（吉田城）を押さえた今川氏は城内天王社（吉田神社）に神輿を寄進されました。神輿に付属した棟札は、重臣の太原雪斎筆と伝わり、今も神社に残ります。



神輿造立棟札（1547）
豊橋市指定有形文化財



昭和40年代の様子

なぜ吉田神社のお神輿を 魚町衆が担いだのか？

義元公は、魚町を手厚く庇護したと伝わり、その恩に報いる為に義元公の寄進した吉田神社の神輿は魚町衆が担ぐ事となっております。

現在のお神輿

現在は、吉田神社の氏子衆（上伝馬町、本町、萱町、指笠町、札木町、西八町、関屋町、三浦町）によって担がれています。



豊橋祇園祭につきまして、詳しくは吉田神社HPよりご覧頂けます。



魚町と頼朝行列

お神輿と鼻高面



江戸時代の頼朝行列を描いた吉田名蹤綜録などには、お神輿の前を進む鼻高面という役も描かれています。この鼻高面もお神輿同様魚町の方が代々ご奉仕されていたと思われ、現在では形を変えて魚町魚伊の山本恵三氏がその役を務めます。



鼻高面の歴史

鼻高面は、子供がその役を務め、面を被り緋の装束を着け、手に軍配団扇を携えて神輿の前を進むというのが本来の姿です。

ただ、大正の頃には面を手を持つようになり、軍配団扇も他人



が持つようになりました。いつからか面自体も付添の大人が持つようになり、子供は装束を着けてあるくのみとなったようです。昭和40年代に魚町衆による神輿担ぎが途絶えると同時に、鼻高面役の子供もいなくなり「面を顔にあってもらおうと夏病みしない」という信仰のみが残り、袴を着た付添のみが行列に従事しました。この信仰・慣習は大正から昭和初期にかけて自然に発生したのではないかと推測されます。

吉田神社祭礼誌によると、江戸時代は吉田城主の前を通過する時のみ後ろ向きに歩いたとされ、吉田名蹤綜録や旧式祭礼図絵馬などにはそのような姿が描かれています。廃藩後は、「後ろ向きに歩く」という所作を出発の際に参道内で再現していたようです。

